

2010.4.26(月)

# 元氣のヒント

◇24◇



加藤 剛志  
徳島大学病院産婦人科

子宮頸がんの発症率は年々増加しており、特に、20〜30代の女性に発生するがんの中では最も高い発症率になっています。子宮頸がんの原因は、ヒトパピローマウイルス（HPV）の感染であることが分かっています。HPVは主に性的接触によって感染しますが、性病とは異なり、性交経験のある女性であればほとんどの人が1度は感染します。HPVに感染しても通常はウイルスが自然に排除されますが、なんらかの原因により感染が持続することでがんが発生します。

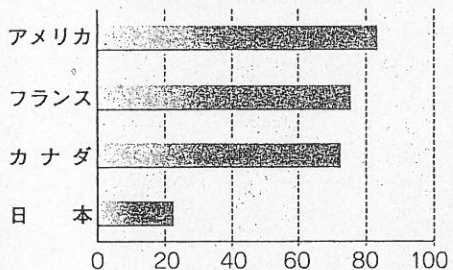
## 子宮頸ガン

てしまう患者さんもありますが、一部の方は、上皮内がん、浸潤がんへと進行していきます。治療の方法は進行度によって異なります。早期であれば、レーザー手術や、子宮の入り口だけを切除する手術で子宮を残すことができます。浸潤がんでは、患者さんの年齢や健康状態に応じて、手術や放射線療法、抗がん剤による薬物療法を行います。

も、放射線療法と薬物療法を同時に行うことで治療成績が向上しています。子宮頸がんを克服するために早期発見が重要です。わが国では20歳以上を対象に子宮頸がん検診が実施されています。

検診は子宮の入り口から採取した細胞を観察する細胞診で行われています。これは痛みも少なく簡便に実施できる上、精度も高く優れた検査方法です。最近では、細胞診に加えてハイリスクHPVに感染しているかどうかを調べる検査を組み合わせることで検診の精度を上げる試みもなされています。しかし、わが国での子宮頸がん検診

子宮頸がん検診受診率 (%)



## ワクチンで予防可能に

受診率は20%程度と低いのが現状です。子宮頸がんに対するもうひとつの取り組みとして、HPVワクチンの接種が始まっています。現在接種されているワクチンは、特に発がんの危険性が高い2種類のウイルス型をターゲットにしている、そのウイルス型での発がんをほぼ100%防ぐことが可能です。そのほかのウイルス型にも効果があり、全体として70%程度の予防効果があります。

より確実な予防のためには、HPVに感染する前（初交前）の接種が重要で、11〜14歳前後の女子に対するHPVワクチンの接種が特に強く推奨されています。ワクチンは、既に感染しているHPVを排除する効果はありませんが、新たな感染を防ぐことが可能であり、15〜45歳くらいまでは接種が推奨されています。

費用について一部の自治体では公的補助が始まっています。ワクチン接種の普及のために、若年女性への定期接種化あるいは公的補助の拡大が望まれます。

ワクチン接種と検診の両輪で子宮頸がんの予防と早期発見が可能な時代になりました。ぜひこれらを受けることをお勧めします。

# 早期発見へ検診を